

様式1 (視察用)

## 会派行政視察報告書

平成 26 年度会派名取グローバルネットの行政視察研修を、平成 26 年 7 月 8 日 (火) から 7 月 11 日 (木) までの 3 泊 4 日 (1 泊は車中泊) にて執り行いましたので、その概要を下記のとおり報告いたします。

平成 26 年 7 月 25 日

名取市議会議長 山口 實 様

会派名 名取グローバルネット

代表 及川 秀一



### 記

1 期 日 平成 26 年 7 月 8 日 (火) ～ 7 月 11 日 (金)

2 参加人員 4 名  
及川秀一 小野泰弘 山田龍太郎 郷内良治

3 視 察 先 (1) 北海道 函館市 7 月 8 日 (火)  
(2) 北海道 北斗市 7 月 9 日 (水)  
(3) 北海道 石狩市 7 月 10 日 (木)

4 行 程 表 別紙のとおり

5 調 査 事 項 別紙のとおり

6 所 感 別紙のとおり

## 函館マリンバイオクラスター形成事業

名取グローバルネット

小野泰弘 及川秀一 郷内良治 山田龍太郎

### 要約

函館市は市内の学術・試験研究機関と協力し、水産・海洋に関する国際的な学術研究拠点都市の形成を目指して、文部科学省の都市エリア産学官連携促進事業や地域イノベーション戦略支援プログラムに採択された。学術・試験研究機関の研究成果に基づき地元企業が開発したユニークな製品は大ヒットし、漁業・水産加工・販売までも含む地域経済・産業の振興が図られている。

### 1. はじめに

函館地域は水産資源に恵まれ、地理的・歴史的要因から、水産・海洋に関する裾野の広い産業群や高いポテンシャルを持つ学術・試験研究機関[1]が集積している。この特性を活用し、水産・海洋に関する国際的な学術研究拠点都市の形成を目指した「函館国際水産・海洋都市構想」[2]のもと、科学技術を産業振興に結びつける多くの取組が活発に行われ、産学官連携の基盤が構築されてきた。海を計測可能な巨大な生産システムと捉え、海洋生物（マリンバイオ）由来有価物の持続的生産に必要なキーテクノロジーを総合的に研究開発し、水産・海洋科学のグローバルなイノベーションを創出しつづける研究機関と地元企業および函館市の集合体を函館マリンバイオクラスター[3]と呼んでいる。

具体的には、地域において産学官の共

同研究体制や人的ネットワークを形成し、研究資金の調達、創業支援などの様々な取組みにより、核をなす大学等の有する独創的な技術シーズ（種）と企業の実用化ニーズ（必要性）が相互に刺激しつつ、地域において持続的にイノベーションを起こす仕組みである。

ガゴメ昆布などの海洋資源を活用して地域産業の振興を図る目的で、都市エリア産学官連携促進事業[4]（文部科学省）が平成15年にスタートし、平成21年からは「函館バイオマリンクラスター」[5]と名称を変え、ガゴメを中心に研究から製品開発までを行ってきた。参画企業は119社に膨らみ、開発された製品は200品目以上に達した。ほとんどがガゴメを使った製品で、キャラメルやもち、サプリメントが定番商品になり、美容分野ではせっけんや化粧水がヒットした。

## 2. 産学官連携による地域資源の高付加価値化の事例

### (1) するめイカの鮮度保持技術

酸素を多量に含んだ海水とともに生きたするめイカをビニール袋に詰めることにより、36 時間にわたってイカの透明度を保つことに成功した。首都圏まで輸送しても鮮度を保つことができる。(市内民間企業2社と北海道大学水産科学研究所の共同研究)

### (2) がごめ男爵 ねばるんだお父さん



男爵薯の発祥地「北海道七飯町」の「池田農園とその仲間達」が丹精こめて作った男爵薯と、北海道大学水産学部が産学官連携で開発した栽培方法に基づき、はこだての名人昆布漁師が丁寧に栽培した「ガゴメ昆布若葉（フコイダン[6]が天然昆布の2倍）を使用している。

### (3) フコキサンチン 1000



北海道大学大学院水産科学研究所の宮下和夫教授の研究成果により開発された。函館沿海に多く繁殖するアカモクなどの褐藻類に含まれているフコキサンチン[7]が主成分であり、脂肪細胞に働きかける仕組みが科学的に解明されている。

### (4) ガゴメコンブめん らーめん・つけめん



北海道大学水産学部 安井教授を中心とする研究から生まれた商品。ガゴメ昆布の特徴を最大限に生かそうと試行錯誤を繰り返し、麺にコシとツヤを出し、昆布の風味と粘りも一緒に味わえる。

### 3. 地域資源を活用した商品を提供・販売する「アンテナショップ」や「飲食店」の事例

平成23年6月にJR函館駅前にガゴメ昆布関連商品を販売する「ねばねば本舗」がオープンした。[8]



JR 函館駅前にある「ねばねば本舗」

ローソン京橋駅前店（東京都中央区）に函館市アンテナショップを平成23年12月にオープンした。取り扱い商品は110アイテムにのぼる。

### 4. 地域ブランド保持のための「ブランド認証制度」

「函館がごめ連合」は、企業主体の継続的広報活動と「函館ガゴメ昆布」のスーパーブランド化をめざすという趣旨に賛同した企業28社が集まり、平成21年6月に設立された。函館ガゴメ昆布の魅力在全国に広め、優れた産業の育成や製品化を応援するため、取り扱い商品に函館ガゴメ連合ブランド協会認定証を表示している。



函館がごめ連合ブランド協議会認定

### 5. 事業への行政の関わり・支援

函館国際水産・海洋都市構想[2]のもと、大学、経済界、自治体など、地域が一体となって知的クラスター本部を構成し、本事業に取り組んでいる。知的クラスター本部は、中核機関と中核研究機関を兼ねる公益財団法人函館地域産業振興財団[9]内に設置され、都市エリア産学官連携促進事業[4]で得たノウハウやネットワークを活用しながら、研究開発から最終的な事業展開までの継続的な推進体制を構築している。

#### (1) 都市エリア産学官連携促進事業[4]

(平成15年度～平成20年度)

平成15年に文部科学省から「都市エリア産学官連携促進事業（一般型）」として採択を受け、平成18年からは「都市エリア産学官連携促進事業（発展型）」として

採択を受けた。これらの 6 年間の取組みの中で、ガゴメやスルメイカといった地域資源の活用により数多くの新商品を開発するなど、大きな成果を上げた。

(2)地域イノベーション戦略支援プログラム[5]（平成 21 年度～平成 25 年度）

函館国際水産・海洋都市構想を推進する上での大型のプロジェクトとして、地域の自立化を促進しつつ、国際競争力を持った、マリンバイオクラスターの形成を目指す事業。平成 21 年度に文部科学省から知的クラスター創成事業として採択を受けた。（※平成 23 年度から、地域イノベーション戦略支援プログラムに事業名変更）

事業主体 公益財団法人 函館地域産業振興財団

事業期間 平成 21 年度～平成 25 年度

事業規模 3 億円程度×5 年間

テーマ名 「函館マリンバイオクラスター～U M I（Universal Marine Industry）のグリーンイノベーション」

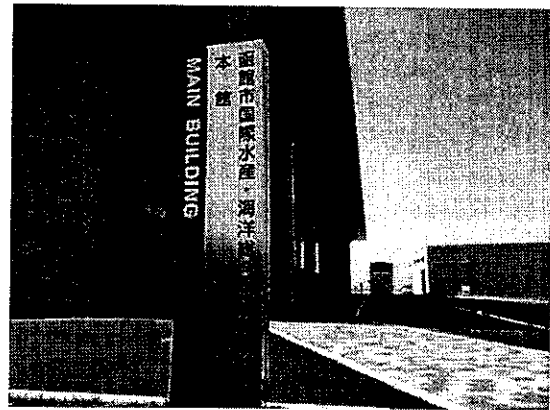
国際水産・海洋総合研究センター

（平成 26 年 6 月供用開始予定）

函館マリンバイオクラスターの研究拠点基地となる、国、北海道、大学、民間等の学術研究機関が集積した総合的な研究施設として「国際水産・海洋総合研究センター」を整備する。また、海外の水産・海洋関連クラスターとのネットワー

クの中心として機能するグローバルな知の拠点形成を目指す。

【主な施設内容：貸研究室、海水取水施設、海洋調査研究施設など】



国際水産・海洋総合研究センター

## 6. 考察

函館市の漁業就業者数は、全国市町村中最も多い 3,388 人である。（平成 22 年国勢調査）これは、周辺海域に暖流・寒流が流れ込み豊かな漁場を形成し、価値の高い水産資源の存在によるものである。また、10 にも及ぶ多くの学術研究機関が市内に集中し、400 人の研究者・5,500 人の学生から成る学術研究都市を形成している。これらの資源を結びつけ、互いに刺激し合い地域産業が持続的に発展する産業モデルが函館マリンバイオクラスターであるといえる。

学術研究機関が結果を出すためには、国などからの多額の研究資金が必要である。この獲得に大きな役割を果たしたのが、道立工業技術センターや函館市であ

り、同時に地元民間企業との橋渡しも担っている。こうして産官学で形成される函館マリンバイオクラスターが産業振興に力を発揮できるのである。

名取市も規模は違えど同様の試みをしてきたが、函館市のような産業振興には至っていない。それは、独創的な技術シーズと企業の実用化ニーズが揃っていないことに一因があると考えられる。各担当課は、市内の資源については熟知しているので、それらを活かす独創的な技術情報の収集に努めていくべきである。

#### 参考文献

- [1] 北海道大学大学院水産科学研究所  
道立函館水産試験場  
道立工業技術センター  
函館高等専門学校  
公立はこだて未来大学 など

[2][http://www.marine-hakodate.jp/01\\_about/index.htm](http://www.marine-hakodate.jp/01_about/index.htm)

[3] クラスターとはブドウなどの果実や花の房のことで、ブドウの粒のような個が連携した組織の集合体の呼称として用いられている。

[4][http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kagaku/chiiiki/cluster/h15\\_pamphlet\\_j.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kagaku/chiiiki/cluster/h15_pamphlet_j.htm)

[5][http://www.mext.go.jp/component/a\\_menu/science/micro\\_detail/\\_icsFiles/afieldfile/2011/12/23/1314543\\_13.pdf](http://www.mext.go.jp/component/a_menu/science/micro_detail/_icsFiles/afieldfile/2011/12/23/1314543_13.pdf)

[6] 函館東海岸に生育するガゴメ昆布から抽出されるネバネバ成分。抗ガン作用やインフルエンザ抑制効果が解明され注目を集めている。

[7] 函館沿岸で獲れる褐藻類の海藻（昆布、アカモク、ウガノモクなど）に極めて微量に含まれる赤い色素カロテノイド。

[8]<http://www.konbu-gagome.com/>

[9]<http://www.techakodate.or.jp/foundbio/>

北斗市 総合文化センター「かなで〜る」の4つの機能について

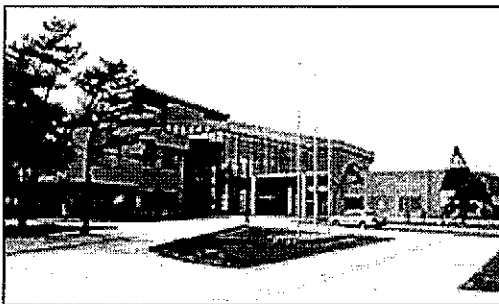
名取グローバルネット

及川秀一 山田龍太郎 郷内良治 小野泰弘

**概要** 北斗市は、豊穡な大野平野と温暖な気候に恵まれ、農業、漁業、工業を中心として発展し、上磯町と大野町の合併により誕生したまちである。当時の旧公民館は昭和41年建設で老朽化しており、加えて文化団体など各種団体活動にも狭隘のスペースのため拡充の必要があった。併せて、図書館の充実や郷土資料の展示・保存を兼ねた施設の要望が市民より強く求められていた。このため、平成元年10月15日に「上磯町文化センター設立期成会」を設立し、後に文化施設建設に係る説明会や検討会が開催された。市民の要望を取り入れながら建設計画がとりまとめられ平成7年8月に工事に着手し平成9年に竣工した。北斗市の総合文化センター「かなで〜る」は生涯学習・芸術文化振興の拠点として、市民が広範に利用できる4つの機能を（①ホール機能②公民館機能③図書館機能④資料展示機能）備えた施設で、市民ニーズを取り入れた複合施設である。

1. 施設概要

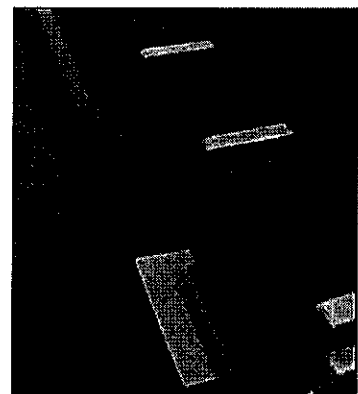
複合施設の施設概要は以下の通りである。  
名称：北斗市総合文化センター  
愛称：かなで〜る  
敷地面積：24,261.21㎡  
延床面積：8,106.60㎡  
駐車場：一般車両353台、大型バス5台、駐輪場72台  
事業費：3,419,998千円  
財源：北海道市町村振興補助金、地域総合整備事業費、町債



▲複合文化施設「かなで〜る」

① ホール機能について

施設ホールの収容人数は大ホールが1000席で（固定席994席、車いす席6席）子ども椅子兼用の座席が用意してある。小ホールは300席で（固定席296席、車いす席4席）楽屋、トイレ付2室、バス付1室やその他にリハーサル室、大道具室、小道具室を備えている。



▲子供用に変更できる座席（大ホール）  
平成25年度のホール機能の利用実績は、

大ホールが170日200件、48,163人、小ホールは168日194件、25,219人の利用者数であり市民の芸術文化活動が活発に行われている。

② 公民館機能について

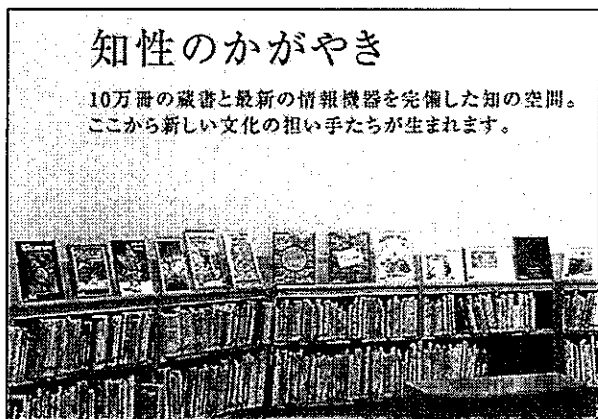
公民館機能として大会議室(445㎡) 中会議室(143㎡) 第1小会議室(73㎡) 第2小会議室(37㎡) 第1和室(143㎡) 第2和室(57㎡) 音楽活動室(183㎡) 調理室(134㎡) [1] などの部屋が備えられている。平成25年度の利用状況は3,468件88,335人である。

サークル活動や団体活動のホール機能を使い発表会、演奏会など生涯学習活動においても積極的な利用が図られている。

③ 図書館機能について

複合施設の中に図書館が設置されている。平成25年の蔵書数は一般図書73,924冊、児童図書27,543冊で101,467冊である[1]。

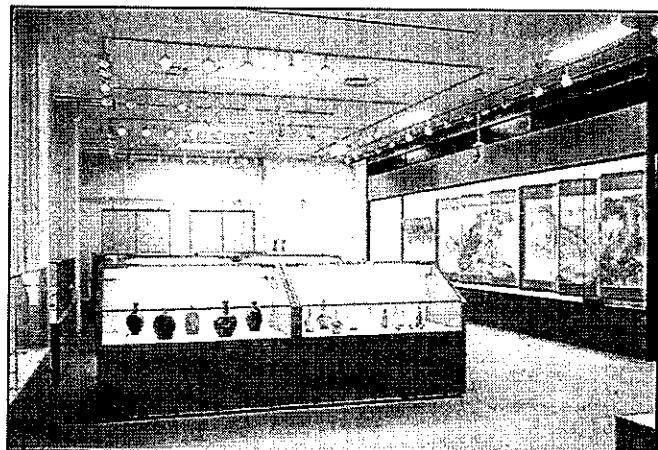
貸出冊数が63,864冊、貸出人数は19,919人となっている。会館日数は282日で1日平均利用者数が71人、1日平均貸出資料数は226点である。個人貸出は図書館資料10点まで14日以内となっており、団体貸出は1か月以内で貸出団体の状況に応じて館長が決定することになっている。



▲10万冊の蔵書をもつ図書館

④ 資料展示機能について

2階には展示スペースとして、特別展示室(185㎡) 資料準備室(121㎡、101㎡) 郷土資料展示コーナー(2階廊下壁面) があり、展示パネル、陳列用ケースなど備えた特別展示室がある。



▲資料展示の様子

2. 施設運営について

施設運営は社会教育課で統括し、社会教育課長が文化センター、公民館、図書館、郷土資料館、体育施設の各館長を兼務し運営を行っている。職員体制は公民館等の社会教育関係が14名、スポーツ関係は5名で総合体育館・市民プールなど市内屋内体育館施設9施設の管理運営やその他運動公園など4か所の運動グラウンドの利用窓口管理を行っている。また、学校教育関係で6名学校給食センター共同調理場に2名の職員体制である。複合施設の今後の在り方については、現在読み聞かせサークルの図書館事業への協力や公民館機能を利用したサークル団体活動の発表会(ホール機能活用)複合施設の機能を活かした演奏会などが行われている。また、利用サークルと社会教育事業の連携を図り事業の講師などをお願いしている。[1]

▲平成25年度利用実績

室名	日数	件数	利用者数
大ホール	170	200	48,163
小ホール	168	194	25,219
第1~3楽屋	321	327	3,999



リハーサル室	303	421	8,388
大会議室	309	483	31,195
中会議室	302	512	13,400
音楽活動室	317	484	11,905
1 小会議室	292	460	6,412
2 小会議室	290	443	3,591
1 和室	246	304	10,606
2 和室	178	199	2,406
調理室	159	179	4,983
サークル室	287	404	3,837

今後は4つの機能を活かした複合的なつながりをさらに進めていく予定である。

考察：

平成元年より複合施設の「かなで〜る」は設立のための説明会や検討会により市民の要望を取り入れながら建設がすすめられた。平成9年に完成し市民の生涯学習活動や芸術文化活動の拠点施設として運営されている。完成から17年が経過し老朽化による建物の維持管理の対応も検討され、市民から今後とも親しまれる場としての対策が図られている。複合施設の運営には社会教育課、学校教育課などの横断的な連携と組織運営が重要となってくる。北斗市の総合文化センターとしての素晴らしい取り組みの成果は人口約4万人都市で全体の利用者数が182,317人となっていることである。[2]

本市では名取駅前地区の複合型拠点施設の整備建設計画が予定されている。その計画と運営には組織の横断的な連携と市民の総合力を結集したワーキングチームによる協議などを行い、施設運営検討会などを設置し実現を図るべきである。本市の施設は官民一体となった施設運営が望まれる。完成後は施設名を公募し親しまれる市民の複合型拠点施設として建設運営されることを希望するものである。

参考文献：

◇北斗市総合文化センターかなで〜るの案内

<http://www.city.hokuto.hokkaido.jp/modules/culture/content0005.html>

◇かなで〜る視察資料 [1]

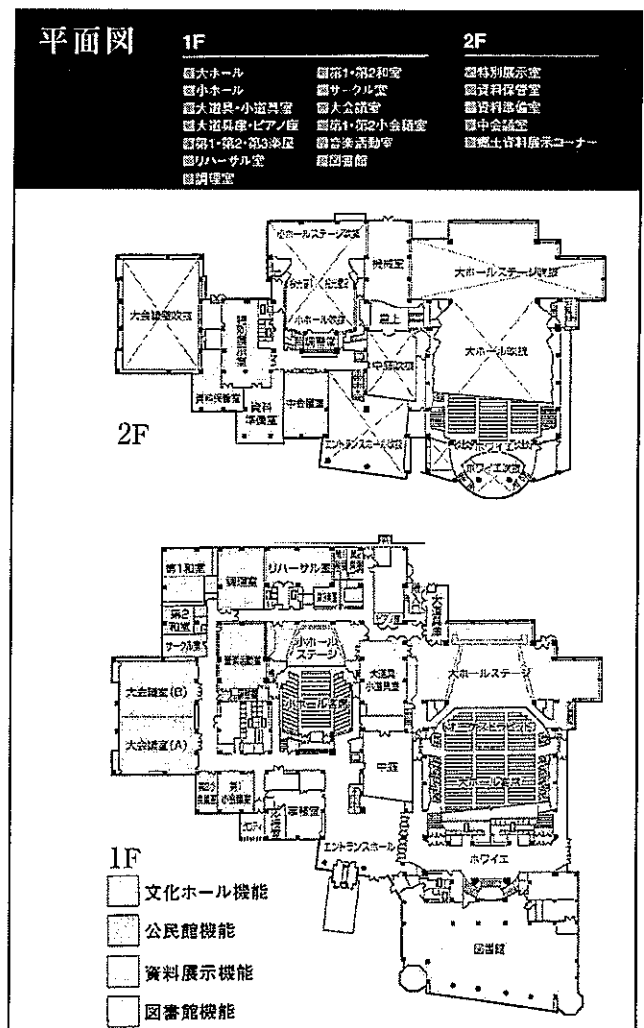
◇北斗市議会の概要 [2]

◇喝・采・響 感動かなで〜る利用のしおり[3]

◇平成26年度かなで〜る協会事業

<http://www.city.hokuto.hokkaido.jp/modules/culture/content0008.html>

◇かなで〜る施設図



## 石狩市市民図書館について

山田龍太郎 郷内良治 及川秀一 小野泰弘

平成26年度石狩市市民図書館事業計画資料に沿って説明を受けた。運営の重大目標は次のとおり。

### 1. 子どもの学びの支援

- ・ 「学校図書館等整備方針」に基づいて、学校図書の実充に取り組んでいる。
- ・ 学校と図書館のオンライン化に力を入れている。
- ・ 子供の幼児期における「ブックスタート事業」10ヶ月健診の会場で本を一冊プレゼントする。また、幼稚園・保育園への出前等取り組んでいる。
- ・ 小・中・高校生と市民とのかかわり（読書活動の推進）ボランティア主導でもって、「図書館まつり」の開催をしている。今年で15回目である。
- ・ 図書館振興財団が開催するコンクールへの参加として、「石狩市調べる学習コンクール（地域コンクール）」の実施、調べる学習は自由研究で体験したものをまとめることで、小学生が対象である。3回目となり、審査の結果2回佳作を受賞している。

### 2. 情報発信を通じて生涯学習を支援

- ・ ジャパンナレッジを活用し、レファレンスサービスの充実に努めている。

- ・ パブリックコメント資料の設置など、関係機関と連携して図書館の蔵書を生かした地域情報や各種情報発信に取り組んでいる。
- ・ 「いしかり館ネットワーク事業」各機関、海浜植物保護センター、公民館、砂丘の風資料館、市民図書館の4施設で情報発信等を行うとして、いわゆるまとめ役事務局を図書館が担っている。専門職の活性化と連携である版画家の展示会の開催を予定している。

### 3. 市民の誰もが利用できるような環境を整備する。

- ・ 宅配サービス平成23年3月より始めた。多忙で利用できない（直接図書館に行けない）、交通が不便、障害のある方等を対象に電話やインターネット等で貸出の申し込みを受け、ゆうメールを利用して自宅へ図書をお届けする「宅配サービス」など、基本料金はかかるけれど、目の不自由な方には音声で伝えることのできる図書を用意する等している。4年間で宅配サービス利用数は、40件程度である。
- ・ 分館の活性化事業、例えば体育館の入口の小さな部屋を利用しての図書を用意

し、地域へ開放する活動に取り組んでいる。

4. サービスを支える基盤を整備する。

- ・ 「基本サービスの検討」を第一番目に取り組むこと。
- ・ ボランティア活動の支援、中でもボランティアサークル「ぬののえほん」による全国コンクールへの出品の支援、名取市にも震災直後に訪問頂いている。



ぬののえほん の書架

尚、今年（平成26年）秋に名取市訪問が予定されている。（読み聞かせボランティア）

- ・ 各種団体との連携の代表的な取り組みとして、石狩の歴史を風化させないため、地元の古老の話しを聞く企画等考えている。
- ・ 公民館の役割との連携も充実させていく。

5. 利用者の期待に応える蔵書・情報源を構築する。

- ・ 蔵書の整備、寄贈受入体制の整備、雑誌スポンサー制度の導入
- ・ 図書館入口に市民、個々が不要になった本を寄贈するコーナー（書棚）があり来館された方々が、自由に持ち帰ることが出来るようになっている。
- ・ 国立国会図書館デジタル化資料閲覧サービスを実施、利用者の調査、研究活動を支援する。

6. 図書館のPRや読書推進のための事業を行う。

- ・ 蔵書を活用して、講座・研修会の開催、廃棄予定の雑誌を無償譲渡する。砂丘の風資料館、石狩市郷土研究会との協力事業。

7. その他

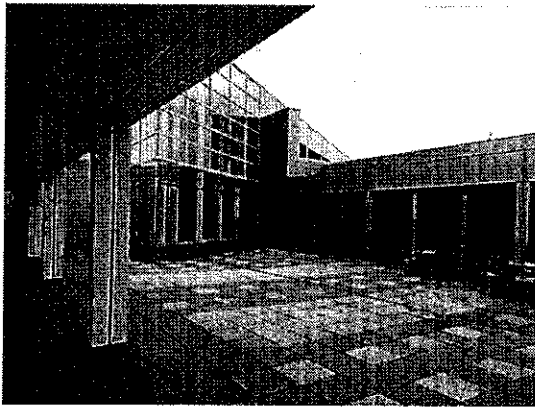
- ・ 名取市図書館・輪島市図書館との交流事業として、防災や文化面での理解を深める。



名取市・輪島市との交流コーナー

- ・ 図書館協議会を開催し、運営に対しての助言、奉仕に対する意見の聴取。

石狩市民図書館は、平成4(1992)年に市制記念事業として図書館事業計画の作業が開始され、平成10(1998)年に建築が着工し、平成12年(2000)年6月にオープンした。「図書館のなかに街を作る」というコンセプトで設計され、「石狩市民図書館」と命名された。



石狩市民図書館

石狩市市制施行以前に、民間団体で「石狩に図書館を作る会」5名程のメンバーがコツコツ活動を展開していた。

図書館開設準備室が設置され、石狩町図書館構想策定委員会で図書館建設計画がスタートしたのである。

作る会のメンバーも含めて10名の策定委員会で、特に小委員会というか専門部会といわれるものは作らなかった。しかし、テーマごとにワークショップを開催し構想を詰めていった。

後に図書館がオープンしてからは、「石狩の図書館と歩む会」と名称を変更し数年間開ったが、現在は存在していない。

「図書館の中に街を作る」ということであるので地域の交流拠点であり、庁内

の団体が利用する科学実験室・コンサート・講演会等活用されている。

「図書館に行くとなにかがある」市民の思いが隅々まで詰っている施設であると自負がある。

特徴的な運営として「利用のバリアフリー」が揚げられる。

一つ だれでも使える利用できる。市外の人利用も可能であり、本の貸出し無制限である。(市民の利用率60%、市外の利用率40%)

二つ 滞在型の図書館(飲み物は全館可能、喫茶コーナーなど)

三つ 様々な情報発信(地場産品の販売、石狩市情報コーナーなど)例えば観光の目玉等



地場産品の販売所

四つ 学校図書館の環境整備(小学校への司書配置、市民図書館とのオンライン化)

五つ 科学の祭典、古文書相談、宅配サービスなどの事業実施。

名取市も含めて公民館またはコミュニティセンター的機能が確立している自治

体とは違って、新たに図書館にその生涯学習の拠点的役割も持たせ、公民館の充実を目指している。しかし職員不足であるとも伺った。

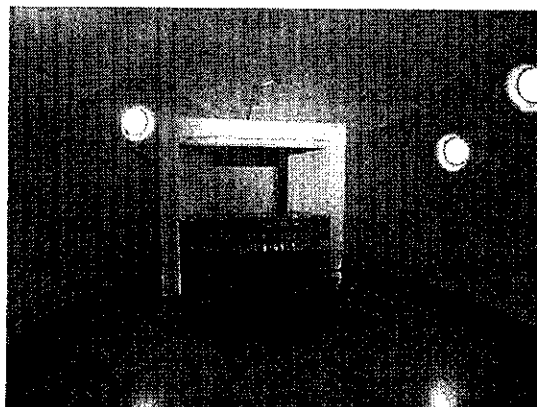
今後の図書館のあり方として「図書館をどう生かすのかということまた、図書館を核とする街づくり、その街づくりに図書館がどう関っていくのか」さらなる充実に向け課題であるとしている。

館内を案内して頂いた。特徴を持った年齢に配慮した3つの読書スペース、書架は4種の色分けがなされ目的の本を探し易くする工夫がされていると感じた。エントランスにおいては、多目的に使用することが出来るよう工夫されている。研修室におけるスクリーンについては、窓際のカーテンボックスに収納されている。ボランティア作業室には入口の上部に難聴者の為の電光掲示板も設置されていた。また、団体ごとの収納ボックスは透明であり壁に組み込まれている。



ボランティア作業室の団体ごとの収納ボックス

この図書館の一つのシンボル・ランドマークとなっている赤いドームは、「おはなしのたまご」として親しまれ、読み聞かせ、紙芝居等行われている。



「おはなしのたまご」の内部

館内のカラーコーディネートも私の感じたところでは、フロアごとに床と壁天井とマッチングしていて落ち着いた空間が演出されていた。



館内のカラーコーディネートの一例

#### 考察

現在「名取駅前地区復興市街地再開発事業」を進めている。東日本大震災からの復興のシンボルの創出、名取駅前のにぎわい創出、災害に強いまちづくりをコ

ンセプトに掲げ、名取駅前複合型拠点施設構想を具現化すべく、手法として「名取駅前地区第一種市街地再開発事業」を選択し、事業協力者選定（事業協力者の決定）をへて「再開発組合設立」現在に至っている。

その複合ビルの中の公共公益施設のスペースに、老朽化し地震被害を受けた名取市図書館再建がなされる事となった。

「地域の拠点を目指した図書館づくりと運営」について、北海道石狩市における民意を十分に生かした図書館作り、建設から現在に至る取り組みを学び、名取市の新しい図書館作りに役立つのではないかとして今回の視察先に選択をした。

名取市の図書館については、まだ具体化したものが示されておらず未知のことではあるが、市民の交流の場となり、また情報の発信の拠点となることは十分に考えられることである。市民に親しまれ

使い勝手のよい図書館になることが望まれる。今回の研修で得た知識を、反映させていきたいと考えている。

仮称名取市図書館基本計画検討委員会が設立、開催されさまざまな市民・有識者で構成されたメンバーによる名取市独自の理想の図書館が建設されることを望むものである。

#### 謝辞

視察研修について、当日石狩図書館に於いて、副館長板谷英郁氏、主査寺尾陽助氏に説明そして管内の案内を受けた。特に寺尾主査においては、6ヶ月間震災支援として我名取市に派遣職員として大きな支援を頂いたことに感謝したい。